

運命ってこういうもの

大切なのは、忘れ物

大学の長い長い夏休みが終わり、秋の気配が少しずつ見えてきた、十月目前。火曜日三限。友達に借りた本を読みながら、教室の後方の席で授業が始まるのを待っていた。

なんとなく面白そうだから、外国語科目の中から韓国語を選択した。けど、知り合いが誰一人履修していなくて、授業を一人で受けることになってしまった。とっっても、つまらない。

続々と履修生が集まってきて、席が埋まっていく。みんな、誰かしらとおしゃべりを楽しんでいる、教室は少しざわめいていた。孤独感がぐっと増す。

チャイムがなった直後、教室に人が入ってくる気配がした。先生が入ってきたのかと、顔をあげる。ほかの生徒も、一瞬だけ声を潜めた。

しかし、入ってきたのは男子生徒だった。ぼっちり目が合ってしまった、私は慌てて本へと視線を戻した。

彼は私の斜め前の空いている席に座った。

彼とは、なぜかよく目が合う。私が意識してるから、そう思うだけなのかもしれないけど。

彼は、スツと背が高く、とても整った顔立ちをしている。染められてない黒い髪。しっかりとアイロンのかけられた、落ち着いた感じの服をいつも着ている。

少しして、今度は本当に先生が教室に入ってきた。私は読んでいた本を、慌てて机の中にしまい、テキストを広げた。

ふと、斜め前の彼を見るとカバンの中を漁ったあと、なぜか頭を抱えている。そうか、と私は気づいて、自分のペンケースからシャーペンを一本取り出した。

声をかけようとした瞬間、彼が私をゆっくり振り返った。

「あ……えっと……」

フライング気味に振り返られ、しどろもどろになる私。

「ペン、忘れたなら……使う？」

小さい声で言った私の言葉に、彼は少ししてから頷いた。

「どうも」

ぎこちない動きでシャーペンを渡す。受け取った彼は、そそくさと前を向いて、授業を受け始めた。

彼も忘れ物をすることがあるんだなど、少し親近感が湧いた。

この韓国語の最初の授業の時、せっかく前日に買い揃えたテキストを、家に忘れてきてしまった。

その時、隣に座っていたのが彼だ。彼は、見せて欲しいともお願いしていないのに、テキストを見せてくれた。

隣の席で授業を受けていてわかったのは、彼はその見た目通り頭が良いということ。私がハングル文字に四苦八苦している横で、彼は練習問題をさっさ解いて暇そうにしていた。

授業が終わり、先生に続いてみんながバラバラと教室を出て行く。

私も次の授業があるから、急いでテキストをカバンにしまう。

「これ、ありがとう」

声に顔をあげると、彼がシャーペンを差し出していた。

「あ、うん……」

それを受け取ると、彼は無愛想に何も言わずに私に背を向け、テキストをしまい始める。

余計なお世話をしてしまっただろうかと、教室を出るときぼんやりと思った。

冷たい風が吹く。日が傾いて、一気に気温が下がっていく。

今日の授業が全て終わり、校舎の間を抜けて校門へと向かう。ほかの曜日なら友達と駅まで一緒に帰るのだけど、火曜日だけは誰とも時間が合わなくて一人で帰る。

この曜日の遅い時限はあまり授業が開講されていないのか、生徒の数が少ない。

そんな人気まばらな校門に、見たことのある姿を見つけた。彼だ。

声をかけるほど、親しくもないし、会釈して前を通り過ぎようとする。

すると、予想に反して彼が私に歩み寄ってきた。

「これ、君のでしょ」

彼の手には、私が昼間読んでいた本があった。

「えっ……あれ？」

私は慌ててカバンの中を探る。あるはずのその本がない。

「あ、ありがとう……私みたい……」

友達に借りていた本だったから、失くしたりしたら大変だ。

彼から本を受け取って、カバンに仕舞う。

そのまま、なんとなく二人で駅の方へと歩き始める。

話すこともなくて気まずいけれど、駅まではほとんど一本道だし、わざわざ別々に帰るのもおかしい気がした。

「えっと、あの……なんで私のだってわかったの？」

「読んでいるのを見かけたし、君が座っていた席に置きっぱなしになっていたから」

「そ、そっか……」

話が途切れてしまう。

駅まではそんなに距離はないのに、いつもの倍くらい長く感じる。

ずっと無言で気まずいまま、黙々と歩いた。

駅が見えてきた時、急に彼が口を開いた。

「輪廻転生って素敵だよな。自分とは別の生を生きる事が出来るんだから」

一瞬、突然なんの話だろうと思った。

しかしすぐに、本の話をしているのだと思い当たる。確かにそんな内容だった。

友達いわく、最近話題になっている本らしいから、読んだことがあっても不思議じゃない。

前世で結ばれなかった男女が、生まれ変わって出会う話のようだ。まだ少ししか読んでいない

から、主役の男女は私の中ではまだ一度も死んでいないけれど。

「でも、同じ時代を何度も生きるのはつまらない」

そう、彼は続けた。

「あの本、読んだことあるの？」

私は確認のために聞いた。そんな話なのだろうか。

「うん……結構前だから、あんまり覚えてないけど」

どこか、心ここにあらずという感じに、彼はぼんやりと言った。

そうこうしているうちに駅にたどり着いた。彼とは電車の方向が違うので、改札を抜けたところで別れた。

すっかりあたりは暗くなっていて、向かい側のホームに彼の姿が見える。電車が入ってきて、乗客を乗せて去っていく。彼の姿もなくなっていた。

髪型も、運命で決まる

この前の一件から、彼は度々声をかけてくるようになった。

最近毎週、隣の席で授業を受けている。いつも彼は始業のギリギリに来るから、私が席をとっておいてあげている。

今日の彼は、いつもよりほんの数分早く教室に現れた。私の姿を見つけ、こちらに向かって歩いてくる。

「おはよう」

「ん、おはよ」

彼がニッコリと笑って返してくれる。

こうやって話すようになる前は、真面目で厳しい感じの人だと思っていたけれど、そんなことないんだと知った。わりと温和で笑顔がかわいい。

「今日、髪型バッチリだね」

「う、うん」

私は不意を突かれ、ドキリとした。

今日は確かに、髪が上手くまとまった。いつも、私の髪は全く言うことを聞いてくれなくて、あちっこちにハネてしまったり、うねってしまっている。

今朝、友達にそのことを話したら、「いつもと変わらないじゃん」と一蹴されてしまった。

気がついてくれたことが嬉しくて、頬が自然に緩む。

「よく……見てるんだね」

そう言うと、彼はかすかに困ったような顔をした。

少しの間のあと、「まあね」と彼は小さく言った。

韓国語の授業が終わり、次の教室へと移動する。

そこには、一緒に授業を受ける友達がいるだけで、まだ他の生徒は来てなかった。

「あんた、ホント今日は機嫌がいいね」

隣の席に座ると、開口一番に友達が言った。

「そうかな？」

「髪型がそんなに気に入ってるの？ そんな変わらないけど」

そう言われ、私は思わずさっきの彼の言葉を思い出してしまう。

「なにヘラヘラ笑ってんの？」

慌てて首をブンブンと振って、顔を引き締める。

「なんでもないよ」

友達は納得していない様子で、ふーんと唸った。

なんと言い訳をしようかと慌てていると、教室に次の授業の先生が入ってきた。両手いっぱい紙の束を抱えている。

「おお、よかった、使えそうなのがあった」

顔見知ったその先生が、私たちを見て言った。

「ちょっと、手伝って」

先生のその言葉に、友達は苦い顔をしたけれど、私は深く追求されずに済んでホッとした。

友達はプリントをホッチキスで止める作業を、私は事務室に残りのプリントを貰ってくる用を仰せつかった。

私はそそくさと教室を出て、事務室へと向かった。

少し離れた棟の一階にある事務室。そこで事務員さんから、大量に印刷された資料を受け取った。

教室へ向かって歩いてると、近づいて来る足音と共に、自分の名前が聞こえた。声を振り返ると、そこにはこっちに駆け寄ってくる彼の姿があった。

「手伝うよ、重いだろ？」

「あ、ありがとう……」

彼は私の腕の中から、プリントを受け取った。

「どこの教室に運ぶの？」

「えっと、5号館の2階……あの、授業遅れちゃうよ？」

「平気、今日はもう授業ないから」

少し前を歩く彼の背中が答えた。

「でも、何か用事があったんじゃないの？」

ここは校門からも離れているし、食堂も図書館も、部活棟も近くにはない。暇つぶしにブラブラしにくるような場所じゃない。

「別にないよ」

「でも……」

「なんとなく、構内をフラつきたい時だってあるよ」

私の言いたいことがわかったのか、彼はそう答えた。言いたくないことなのかもしれない。

「ご、ごめん……」

思わず謝った私を、彼が立ち止まり振り返った。

「うーん……運命なんだよ。出会う、運命なんだよ。どうしても」

「……え？ どういうこと？」

突拍子もない返答に、私は首をひねった。

彼は、何も答えずに笑い出した。私の驚いた顔が面白かったのか、自分が言ったことが恥ずかしくなったからなのか、どっちかはわからない。

クスクスと笑ったまま、彼は再び私に背を向けて前を歩き出した。

いろいろと、わからない

先週出された韓国語の課題が、まだ終わっていなかった。

あんまり量が多いわけじゃなかったから、すぐ終わるかなと思ったのが間違いだった。夕べやってみたら、全然わからない。

結局、悩んでいるうちに寝てしまい、課題が終わっていないまま提出日になってしまった。

私は一緒にお昼を食べていた友達と早々に分かれて、いつもの教室へと向かう。早く課題を終わらせてしまわないと。

ドアを開けると、誰もいないだろうと思っていたそこには、彼の姿があった。いつも一緒に座っている後方で、本を読んでいる。私に気がついて顔を上げた。

「おはよう」

「お、おはよう……」

彼がいるとは思わなくて、私は驚いた。いつも彼は始業のギリギリに来る。

いつまでもドアの前に立っている私に、彼は隣の椅子を引いて座るように促す。

「今日は、早いんだね」

「……うん、まあね。課題、やってきた？」

「ううん……よく、わからなくて」

そう言うと、彼はクスリと笑った。まるで、私の答えが分かっていたみたいに。

「どこ？ 教えてあげるよ」

「本当!？」

私はいそいそとテキストとノートをだした。

「ここなんだけど。この単語がわからなくて」

「ああ、連体形ね……」

彼は私の手からシャーペンをスツと取り上げて、走り書きする。

「未来形の場合は、パッチムがあるときはこれ、ないときはこっちを動詞のあとに付ける」

問題の下にわかりやすく説明を書いてくれる。

「活用の一覧表がテキストの一番後ろにあるよ」

そう彼は私のテキストに手を伸ばし、そのページを開く。自分の手元のペンケースから付箋をとって貼り付けた。

「はい」

「ありがとう……」

私はそのページと問題を見比べながら、課題を解き始める。

わからないところは教えてもらいながら、なんとか全問終わらせることができた。その頃には、教室にはだいぶ生徒が集まり、始業の直前になっていた。

「ありがとう。……ねえ、今日はなんで来るの早かったの？」

「ん？」

彼は問に少し戸惑ったような表情を見せた。

その時、ちょうどチャイムがなって教室に先生が入って来た。

彼は、内緒、というように微かに微笑んで、前に向き直った。

今日といい、プリントを運んでいた時といい、彼はいつもタイミングよく私の前に現れる。何でなんだろう。

韓国語の授業が終わり、その次の四限の授業中、ずっとそんなことを考えてた。

「ねえ、ずっと何考えてたの？」

授業が終わってすぐ、一緒に授業を受けていた友達に聞かれた。

「え……えっと」

「ああ、わかった。この前の人のことだ。ほら、プリント運んでくれた」

「ち、ちがっ」

「その顔は凶星だね」

友達はからかうように笑った。

「もしかして、まだメアド聞いてない？」

ウツと私は返答に詰まる。

自分から聞くのは勇気がいる。親しくなった今も彼から聞いてくることもないから、聞いちゃいけないような気分になって、言葉が出ない。

「ああ、まだなんだ」

呆れたように友達が言って、さっさと荷物をまとめて教室を出て行った。私は慌ててその後を追う。

「ボヤボヤしてると、他の子にとられちゃうよ」

「だ、だって……」

「そもそも、彼女がいるかどうか聞いてみたの？」

「聞いてない……」

尻すぼみに答える。

私は、彼の何を何も知らないんだ。同い年であることと、別の学部であること、部活にもサークルにも所属していないということ、そのくらい。どこのへんに住んでるかとか、好きなものも趣味も、何も知らない。

なんだか、とても憂鬱な気分になってくる。

「ダメだなあ、そんなんじゃ。……じゃ、またね」

学部棟を出たところで、友達が校門の方へと駆けていった。遠くなる背中を見送る。

はあ、とため息をついた時、名前を呼ばれた気がして、声のしたほうを振り返る。

後ろには誰もいなくて、首をかしげる。

「こっちこっち！」

声が上から降ってきて、空を振り仰ぐ。冷たい風が頬を撫でた。

学食の二階テラスに、彼の姿を見つける。私に向かって手を振っていた。私はさっきまでの落ち込んでいた気分がどうでもよくなって、手を振り返した。

彼が不意に私から視線をそらした。その彼の隣には、綺麗な女性の姿があった。彼はニコリと笑って、その女性となにか言葉を交わしている。

あの方は、彼の友達なのかな。それとも、と思考が嫌な方に行く。

私は思わず、その場から駆け出した。

彼と他の女の人と一緒にいるのを見ていられなくて、次の授業の教室まで全力で逃げた。

あんな素敵で、優しくて、カッコいい人なんだから、彼女がいるのは当然かもしれない。胸が締め付けられるように苦しい。

彼のこと、何も知らないのに浮かれた気分になっていた自分が、とても恥ずかしく感じた。

冬を感じさせる空気が、私の心までも冷たくしていった。

忘れられない、夜景

翌週、重い気分で韓国語の授業に向かった。

もちろん彼はまだ教室に来ていなくて、ほかの生徒のざわめきの中で、私はそわそわしていた

。この前は、ちゃんと挨拶もしないで逃げてしまった。彼は気を悪くしたかもしれない。それに、なにより、私は彼の隣にいた女性のことが気になって仕方がなかった。

モヤモヤと、教室の雑音を聞きながら机に突っ伏す。

「どうしたの？」

上から声が降ってきて、私は飛び起きた。

そこには彼の姿あった。

「ううん。なんでもない……おはよう」

「おはよ。具合悪い訳じゃないよね？」

「うん……」

「そう」

彼は軽く返事をして、私の隣に座った。

胸の中が、モヤモヤぐるぐるする。こんなんじゃ、まともに授業を受けられる気がしない。

「あ、あの……」

「なに？」

私は思い切って聞こうと口を開いた。でも、続きの言葉が出てこない。

「どうしたの？」

「あ、え、えっと……休みの日とか、何してるの？」

思っていたこととは全然違うことを聞いてしまう。

「そうだな……」

彼は唐突な私の質問を意に介す様子もなく、考え始める。

「本読んでるかな。趣味っぽい趣味がないんだよ」

「そうなんだ……」

「あ、でも、高いところが好きかな。たまに、バンジージャンプしに行ったり、スカイダイビングしたこともある」

「へえ……怖くないの？」

意外な趣味に私は驚いた。

「うん。怖くない。車で見晴らしの良いところに行ったりとか。このへんだと……」

彼が言いかけた時、教室に先生が入ってきた。それとほぼ同時にチャイムがなる。

またあとでね、と言うように彼は私に微笑んだ。

小難しい韓国語の授業が始まり、四苦八苦ししながら内容についていく。

先生が例題を板書しているとき、ツンツンと肩をシャーペンでつつかれた。何？ と彼を振り

返ると、彼が顔を寄せてくる。

「今日、放課後暇？」

「五限まであるけど、そのあとなら特に何もないよ」

彼の耳打ちにドキドキしながら返事を返す。

「じゃあ、いいところに連れてってあげる。駅前の西口側のパーキングにいるから、授業終わったら来て」

突然の誘いに、私はドギマギしながら頷いた。

彼はニコっと笑って、板書へと視線を戻した。

そのあとの授業は、ずっと上の空になってしまった。

今日の授業を全て終わらせ、足早に駅へと向かった。あたりはすっかり、日が傾いて薄暗い。

言われた西口のパーキングに向かう。青色の車の横で、こっちに向かって手を振る彼の姿を見つけ、思わず足が速くなる。

「よかった、来てくれて」

彼がホッとしたように言った。

「来てくれなかったらどうしようかと思って、ずっとドキドキしてた」

はにかんでいう彼に、私の頬も緩む。

「乗って」

彼に促され、私は助手席に乗った。

自分の家の車以外、ほとんど乗る機会のない私は、ひどく緊張していた。

「どこに行くの？」

「ん？ いい場所」

彼はそう言うと、私がシートベルトをするのを待ってから、車のエンジンをかけ発進させた。

「急に誘ってゴメンね」

「ううん」

「絶対、気に入ると思うんだ。多分、一生忘れられないくらい、いい景色の場所」

断言するように言う彼。

あたりが暗くなり、ヘッドライトが行く道を照らし、街灯が道を描いている。

車は高台の方へと向かっていて、少しずつ人気がなくなってくる。

たどり着いたのは、展望台のある公園だった。

駐車場に車を停める。ほかに人はいないようで、私たちの乗ってきた一台だけがポツンと停まっている。

「こっち、暗いから気をつけてね」

「うん」

頷いて彼の後をついていく。

電灯がほとんどなくて、本当に暗い。木々が生い茂っていて、たくさんの枝が月の光を遮って

いる。そんな木のアーチの中を通る、足場の悪い階段を登っていく。

「あっ」

私が足を滑らせると、彼がサッと手をとって支えてくれた。

「昨日の雨でぬかるんでるね。もう少し行ったら、舗装されてるところに出るからね」

そう言って、彼は私の手を握ったまま階段を再び登りだす。

少し登ると、ひらけた場所に出て見通しも足場も良くなった。彼が私の手を放して、少し手が寒くなる。

「あそこの展望台」

彼が示した先を見る。

三階建て位の高さの展望台。それを見上げていると、先に建物の前まで行っていた彼に手招きされる。

少し薄暗いその中に一緒に入る。

「入って平気なの？」

「うん。売店とかはもう閉まっているから、暗いだけだよ」

彼に促されて、入口横の階段を登っていく。

階段の小窓から、月の明りが差し込んでいる。

昇りきった先の屋上の扉を、彼が開ける。

「わあ……」

思わず声を漏らした。

腰ほどの高さの柵のところまで、私は駆け寄った。

「すごいでしょ」

「うん！」

彼の顔を見ると、彼は満足そうな顔で笑っていた。

展望台からの景色は、遮るものがなく三六〇度見渡すことができた。遠くの海までが見渡せる。街の明かりがキラキラと模様を描いていた。

「綺麗だよ。僕、ここがすごく好きでね。って言っても久しぶりに来たんだけど。気に入ってもらえたかな？」

「うん、すごくいい場所だね」

夜景に目を奪われながら、答える。

十二月を目前にした、冬の風が私たちの間を吹き抜けていく。

彼が、そっと私に身を寄せた。その間近に感じた体温に、鼓動が早まる。

微かに聞こえた、私の名前を呼ぶ声。

腰に、彼の腕が回る。

恐る恐る、彼の方を伺い見る。

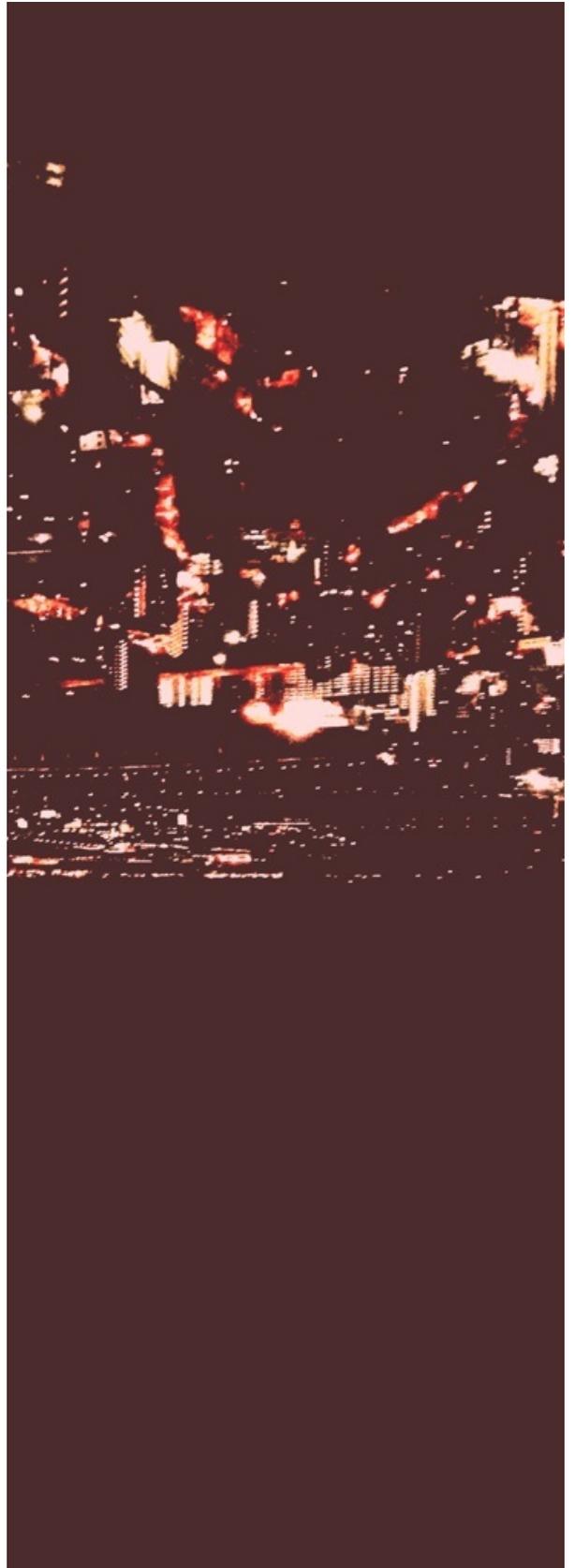
すぐそこまで迫った彼の顔に、私は目をつむった。

耳を打つような自分の心臓の音。

閉じた目の裏には、さっき見た夜景がくっきりと焼き付いている。

フワリと、身体が浮くような感覚が襲った。

私は、今まで感じたことのない幸福を感じた気がした。



大切なのは、変わらない癖

秋学期が始まって三週目かそのくらい。

僕はいつもと変わらず、始業ギリギリに教室に向かった。

ドアを開けると、教室中の学生の視線が僕に集まる。講師が来たのかとでも思ったのだろう。

僕の視線は、学生たちの中から、一人の女子学生を捉えた。

韓国語の最初の授業で彼女を見つけた時、運命を感じずにはいられなかった。彼女は、僕の運命を左右させる大切な人物だ。

僕は、彼女を遠い昔から知っているのだ。

それを証明させるように、彼女は僕の思っていたとおり、その日、テキストを忘れてきていた。僕がテキストを見せてあげるのも、定めだった。

彼女の斜め前の席が空いていて、僕はそこに座る。

始業のチャイムと同時に講師が教室に入ってくる。

僕は、カバンからテキストを出して愕然とした。ペンケースがない。また、やってしまった。この忘れ物の癖だけは、いつまでも治らない。ずっと前からだ。

頭を抱えた僕は、ひとつのことを思い出した。これは、まさかと思って振り返る。

斜め後ろにいる彼女と目が合う。突然振り返った僕に、彼女は驚いているようだった。

「ペン、忘れたなら……使う？」

やっぱりそうだ、僕は確信した。

「どうも」

ペンを受け取って、前に向き直る。

僕は、彼女の生まれ変わりなのだ。

ずっと昔、僕は彼女の人生を生きたのだ。

僕はとても特殊な人間だ。前世の記憶を受け継いで、次の生命へと生まれ変わっている。今まで、何人もの人生を生きて、何度も死んで、何度も生まれてきた。

すべての人生を明確に覚えているわけではないが、重要なことと、印象深いことは大体覚えている。

その僕が受け継いでいる輪廻転生の一番最初の人生が、彼女の人生なのだ。

一番先頭の彼女は、そのあと何度も生まれ変わるなど知らずに生きている。もちろん、自分の人生に僕が深く関わってくることなど、露ほども知らない。

自分がこの名前でも自我をもった時、どこか違和感を覚えたものだった。確かに聞いたことのある名前なのだ。

もちろん、何人もの人生を歩んだのだから、同姓同名も珍しくはない。

不思議と、死んだ場所と近い場所で生まれ変わるらしく、僕は八割方日本人として生まれてきた。

しかし、時間は輪廻転生にはあまり関係ないらしい。今の人生から百年後くらいの人生もあった。いつか、同じ時系列に生まれ変わることもあるだろうと、少し前の人生で気が付いた。それから二回ほど死んだあと、それはわりと早く現実となった。

高校に上がった頃、顔つきが大人らしくなってきたあたりで、僕は彼女の人生に関与する男であることを確信した。

僕は彼女に出会うように努め、この大学に入学し、この韓国語の授業をとった。

予想はどんどんと確信になっていく。やはり、彼女は僕の記憶の中にある彼女のままで、僕は彼女だった時に見た僕のままだ。

僕には、何度生まれ変わっても治らない癖がある。忘れ物をよくすることだ。

今日、ペンを忘れて、彼女に借りることになることも、僕は知っていたはずなのに、案の定忘れてきてしまった。

これも、運命だから避けられないことなのだろうか。彼女に出会ってから、定められた人生を生きている感覚が、僕にいつもつきまとっている。

「これ、ありがとう」

授業が終わり、彼女にペンを返す。

昔の自分と会話をするのはまだ慣れない。

教室を出て行く彼女を振り返る。髪型を気にするように手で梳かしながら、ドアの向こうへ消えていった。

僕は不意にあることを思い出して、彼女の座っていた席の机の中を見た。案の定、友達に借りた本が置きっぱなしになっている。

それを手にとって、パラパラとめくる。彼女だった時に一度読んだ本だ。当時、と言うか今現在、話題の本らしいが、今も昔もあまり流行りには興味がない。

それをとりあえずカバンにしまった。彼女の五限の授業が終わるまで、適当なところで時間を潰さなければならない。

行動は、運命が決める

僕は、古い彼女の記憶に従って、彼女と交流を持つようになった。

彼女と接するときは細心の注意を払った。僕は彼女に好かれなければならない。自然としていても好かれる運命なのかもしれないけれど、それでも、何かの間違えで彼女の人生が変わってはいけないのだ。

いつもよりすこし早く、彼女の待つ教室へたどり着いた。彼女の姿を認め隣に座る。

「おはよう」

「ん、おはよ」

挨拶を返しながらか彼女を見ると、心なしかいつもより機嫌がよさそうな気がする。

そうか、と思って僕は口にする。

「今日、髪型バッチリだね」

「う、うん」

褒めると、彼女は頬を緩ませて喜んだ。

そういえば、毎日髪型に一喜一憂していた気がする。

確かに今日は、毛先が落ち着いて上手くまとまっている。でも、いつもとさほど変わりはない。他人として見てしまえば、その程度の変化なのだ。

「よく見てるんだね」

彼女は恥ずかしげにそう言った。

それは、ひどく的外れな言葉に感じた。

僕は彼女をよく見ているわけじゃない、僕は彼女のすべてを知っているのだ。

しかし、そうも言えないので「まあね」と答えておいた。

授業が終わり、特に用事もないので帰ろうと校門の方へと向かう。

すれ違う学生を見ながら、もし、この中に遠い未来の僕が居たらと、そんなことを考えた。自分のことを全てお見通しの他人がいたとしたら、少し気味が悪い。

過去の自分、彼女に少し悪い気もするが、そんなことは言っていられない。そういう運命なのだから。

校門に差し掛かった時、僕はふとあることを思い出した。

髪型の話をした時、僕ともう一度会わなかったか。

僕は踵を返し、事務棟の方へと駆けた。

案の定、そこには大量のプリントを運ぶ彼女が見えた。僕は慌てて彼女を呼び止める。

「手伝うよ、重いだろ？」

「あ、ありがとう……」

僕は彼女からプリントを受け取る。

「どこの教室に運ぶの？」

聞かずに居たらおかしいだろうと思い、とりあえず訪ねながら五号館の方へと歩き始める。

「……あの、授業遅れちゃうよ？」

「平気、今日はもう授業ないから」

彼女に背を向けたまま、僕は答える。

「でも、何か用事があったんじゃないの？」

しまった。そう思いながら平然を装おう。

「別にないよ」

「でも……」

確かに、こんなところに用事もないのにいるのは少し不自然なのだ。僕も彼女だった時、ひどく疑問に思ったものだ。

「なんとなく、校内をフラつきたい時だってあるよ」

「ご、ごめん……」

謝る彼女を僕は振り返った。

「うーん……運命なんだよ。出会う、運命なんだよ。どうしても」

「……え？ どういうこと？」

彼女は戸惑った表情を浮かべた。

そう、運命なんだよ。いつか、君にも分かる時が来るんだ。

奇妙な優越感に、僕は笑わずにはいられなくなった。

いつか、僕が笑っている理由を、彼女は知る時が来るんだ。それは、何人もの人生を送ったあとの話なのだけれど。

いろいろと、覚えている

夕べ、先週出された韓国語の課題をときながら、あることを思い出した。

僕が彼女だったころ、僕にこの問題の解き方を教わったことだ。

今日は、僕が彼女にそれを教えなければならないので、いつもよりずいぶんと早く教室に来た。もう少ししたら、彼女が教室にやってくるはずだ。

予想通り、あるいは運命通り、昼休みの中頃、彼女は僕の前に現れた。

「おはよう」

「お、おはよう……」

彼女は僕が教室にいたことに驚いているようだった。

「今日は、早いんだね」

「……うん、まあね。課題、やってきた？」

僕は、早速聞いてみる。

「ううん……よく、わからなくて……」

思った通りの返答に、思わず笑みがこぼれてしまう。

「どこ？ 教えてあげるよ」

「本当!？」

彼女は嬉しそうに笑って、テキストとノートを取り出した。

彼女に勉強を教えるのは簡単だった。

好きな男に教えてもらった記憶、というのは、鮮明に残っていた。

僕が彼女の時、彼女は僕に夢中だった。

今思えば、それは決められていたことだったのだ。輪廻転生という命の連鎖の中で、未来の僕が定めた運命なのだ。

彼女の受けた好意が先なのか、僕が行う行為が先なのか、それは定かではない。

そんなことは関係がなく、記憶の限りを再現しなければならない。彼女の人生が変わってしまったら、命の連鎖が変わってしまうだろう。

それは、僕の輪廻転生にも影響を及ぼすだろうし、生殖といういみでの命の連鎖も変わってしまう可能性もある。

ヘマは許されないのだ。

運命を左右する、あの日が着々と近づいている。

授業が終わり、食堂のテラスで風に当たる。

「何してんの？ こんなところで」

声に戻ると、知った顔の女がいた。同じ学部の女だ。

「うーん、風にあたってる」

「はあ？ 寒くないの？」

「寒いよ」

もう十一月も後半なのだから、当然だ。

「こういうところ、好きなんだよね」

そう言って、手すりに身体を預けて下を見下ろす。

ここは、それほど高くはない。ホントはもっと高いところが良い。

そこから飛び降りるところを想像する。スツと体の中を風が通り抜けていく感覚。

僕は何度も生きた人生の中で、何度か転落死を経験した。魂がそれを望んでいるのか、かなりの高確率だ。僕の人生もまた、落ちて終わるのかもしれない。

高いところに恐怖は無かった。むしろ、心地がいい。

再び、テラスの下を見下ろすと、彼女の姿を見かける。呼びかけると、彼女はあたりを見渡して声の主を探した。

「こっちこっち！」

叫ぶと、彼女は僕を認めて、嬉しそうに手を振ってきた。

「だれ？ 彼女？」

隣にいた学部の女が、僕に聞いてきた。

「うーん、彼女じゃない。でも、運命の人」

「何それ」

女は馬鹿にしたように笑った。

「あ、彼女行っちゃったよ」

その女の指さした先には、駆けていく彼女の後ろ姿があった。

「ああ、もしかしたら勘違いしたのかも」

もしかしなくてもそうだ。

彼女は、この女と僕の仲を疑ったのだ。

「ねえ……ちゃんとただの知り合いだって言っておきなよ」

「そうだね」

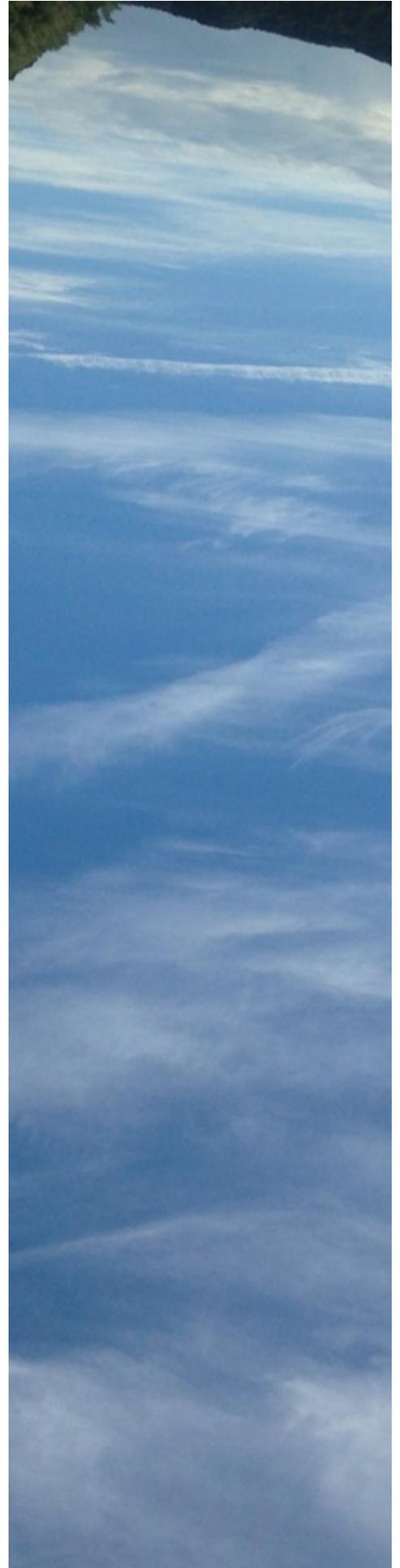
上の空に答えた僕に女が声を荒げる。「ちょっと、好きなんじゃないの彼女のこと？ そういうの、早く言ったほうがいいよ。ほら、今すぐメールしなって」

「メアド知らないから」

僕の返答に、女は呆れたようなため息をついた。

メアドも携番も、怖くて聞けない。彼女が僕に聞けなかったように、僕も彼女に聞くことができない。

今だったら分かる。僕が彼女だった時わからなかった、僕が彼女にメアドを聞けなかった理由が。聞かないと知っていたから、聞けなかっただけのことだ。



今頃、彼女の気分は落ちているだろう。僕らの人生は落ちてばかりだ。気分も身体も。

それでも大丈夫。今のところ、僕の知る僕をしっかりと演じられている。



テラスに風が吹き抜けていく。冷たく、懐かしい風が。

忘れられない、感覚

駅前のパーキングで、彼女を待つ。

授業中、こっそりと彼女にここに来るように約束した。

来ると分かっているけど、もし来なかったら、という不安は拭えない。

あの時僕が言っていた、ドキドキしながら待っていた、というのは本当だったんだ。

まだか、まだか、と待っていると、遠目に彼女を見つける。手を振って彼女の名前を呼ぶ。彼女も僕に気がついて、駆け寄ってきた。

「よかった、来てくれて。来てくれなかったらどうしようかと思って、ずっとドキドキしてた」
心底安堵して言う。

彼女は緊張した顔を、少しだけ緩めた。

「乗って」

助手席のドアをあけて、彼女に乘るよう促す。

僕も運転席にまわって車に乗り込む。隣に座った彼女は、再び緊張して肩に力が入っている。

「どこに行くの？」

「ん？ いい場所」

自分のシートベルトを締め、彼女がならってするのを待ってから、エンジンをかけて発進させた。

「急に誘ってゴメンね」

「ううん」

「絶対、気に入ると思うんだ。多分、一生忘れられないくらい、いい景色の場所」

僕が言うのだから確かだ。

僕は覚えている。彼女だった時に見た、あの夜景を。今もくつきりとまぶたの裏に描くことができる。

もう、ずいぶんとそこには行っていない。僕が僕になってから一度も訪れていない。地図で確かめた場所を思い出しながら、目的の場所へと向かう。

学校から少し離れた、展望台のある公園。

その駐車場に車を停める。記憶のとおり、そこには僕ら以外の姿がない。

月の光を遮る、木々のアーチの下を通りながら、展望台へと向かう。転びそうになった彼女の手をとって、階段を登っていく。

上へ上へと上がるに連れて、鼓動の音が早くなる。

手に汗をかいているのがわかる。ひらけた場所に出たところで、慌てて彼女の手を放した。

あの時見たままの姿で建っている展望台。同じものを見ているのだから、当たり前と言え当たり前だ。

「入って平気なの？」

「うん。売店とかはもう閉まってるから、暗いだけだよ」

不安げな彼女に言って、入口横の階段を昇る。

屋上への扉を開けると、彼女は感嘆の声を漏らした。すぐに柵のところまで駆け寄っていく。

「すごいでしょ」

「うん！」

楽しそうに返事をする彼女。

僕は、すごく満たされた気分だった。それは、大好きな高いところにいるからだけではない。彼女をやっここまで連れてくることができた。

ずいぶんと久しぶりに見る、展望台からの夜景。まぶたの裏に残っている、そのものの景色。「綺麗だよな。僕、ここがすごく好きでね。って言っても久しぶりに来たんだけど。気に入ってもらえたかな？」

「うん、すごくいい場所だね」

彼女は遠くを眺めたまま、そう答えた。

冷たい、僕の大好きな風が吹き抜けていく。

僕は、緊張を少しでも緩めるように、ゆっくりと深呼吸をした。

恐る恐る、彼女に近づく。避けられたらどうしよう、などという今更な不安がまとわりつく。

小さく、彼女の名前を読んだ。

彼女の腰に手を回す。

彼女が少し怯えた目を僕に向けた。しかし、すぐに身を委ねるように彼女は目を閉じた。

この時をずっと待っていた。

この瞬間が訪れるよう、彼女に関わるすべての行動に気を使った。

やっど、やっど終わる。

僕は、かがみこんで、もう片方の腕を、彼女の膝の裏へと回した。

唇を噛み締めて、彼女の軽い体を持ち上げる。

そして、そのまま柵の外へと放り投げた。

目を閉じたままの彼女が、夜景の底へと落ちていく。

一瞬の静寂のあと、地面にぶつかり彼女がバラバラになる音が聞こえた気がした。

これで、彼女の魂が次へと受け継がれる。

そして、これで僕の人生も守られた。

これから先、どうなるかはわからない。すぐに警察に捕まるかも知れないし、捕まらないかもしれない。帰る途中に事故にでも合うかもしれない。それとも、またどこかから落ちて死ぬのかもしれない。

とにかく、僕が知っている僕は、これで終わったのだ。僕は定められた運命をやり遂げたのだ。

いや、これからも運命の中で生きていくのかもしれない。

それでも、それを知っているかないかという差はとても大きい。

僕の知る僕の人生は、彼女が目を閉じた瞬間で終わったのだ。

彼女という呪縛から、過去の自分の人生から、解放された気分だ。

彼女が受けた殺人という行為が先なのか、僕が犯した殺人という行為が先なのか、僕にはわからない。

僕に分かるのは、僕が彼女だった時のこと。彼女が最後に得たのは、綺麗な夜景と、フワリと宙に浮くような、幸福な死の感覚。それだけだ。

冷たい、風が吹く。

僕の大好きな、死を感じさせる風が。



